

Nicholas Nickleby における 'appearance' について

東 田 千 秋

It is well that the Lord can see deep down into the hearts of men, for He has to judge them; it is well that the majority of mankind cannot, because, if they could, the world would be altogether too sorrowful to live in; and we do not think the angels can, either, else they would not be happy—if they could and were they would not be angels any longer—they would be devils. —Henry Lawson: "Coming Across", *While the Billy Boils*, Second Series.

零落して洗濯屋で働いている Mr. Mantalini が仕事を忘れて女主人から "Oh you false traitor." (LXIV, 821, *The Oxford Illustrated Dickens*) と罵られることば、Nicholas から Lillyvick が結婚したと聞いて、Kenwigs が Lillyvick のことを罵る "Villain, ass, traitor!" (XXXVI, 465) ということば、Charles Cheeryble が Tim Linkinwater のことを "A treacherous dog!" (LXIII, 813) と言うことば、これらは表向きは同じような語句であるが、使う人物によって意味はそれぞれに異なっている。洗濯屋のおかみの使うのは文字通りのこの語の意味を持っているが、Lillyvick の遺産を自分の子供のために期待している Kenwigs は、期待を裏切られたという一時的な感情で相手を罵っているのであり、Cheeryble の場合は、双生児兄弟と Tim との間でいつも交わされている冗談の一つで、悪意などは微塵も含まれていない。語を反対の意味に使う antiphrasis は珍しくはないが、同じことばの持つ複雑で微妙な意味の違いはこの小説全体の絵模様を暗示しているのである。

この絵模様の構図を作っている重要な要素に人間の自然の情がある。上に並べたことばは皆、その時々感情に発している。Charles Cheeryble は人間に

とって自然な愛情や本能は神の与える最も美しいものであって、それが他の感情によって妨げられないように大切に守り育てることが人間の務めであると言う。子を受したことの無い親が子に自然の愛情の無いことを責め、子としての務めを果たしたことの無い者が親に自然の情の無いことを歎く。道徳家は命の太陽に浴したこともない、このような不幸な親子には、自然の絆というものが無視されていると説くが、Cheeryble は、人間から離れた存在として自然があるのではなくて、そう思うことが人間に自然を見失わせることになることを教える (XLVI, 595—6)。自然は誕生と同時に人間の心に植えつけられるということであろう。人が自然を知るには自分自身を見ればよいのである。Ralph Nickleby は 'know thyself' を信条としている (XLIV, 567) が、彼は、悪事の企らみが彼の心に芽生える時、それを正当視しようとして自分をすべての人間の典型と見なければならぬ。この文脈の中に書かれている 'he was at little pains to conceal his true character from the world in general' ということばはそのままの意味として受け取れないであろう。彼の人間的な弱さはそこまで傲慢になることを許さないとと思われるが、反対に彼は自然の情というものを無理に殺すために悪の計画に走るのである。

Ralph については Brooker が彼の秘密の結婚と長男の出生の事実を発した後で、この長男が死んだと報せた時の Ralph の反応を "He might have been disappointed in some intention he had formed, or he might have had some natural affection." (LX, 788) と述べているが、Ralph はこの子供を利用して企らんでいた計画の挫折に対する失望の方が自然の愛情よりも強いはずである。彼にとって自然な感情は 'But, one tender thought, or one of natural regret, in his whirlwind of passion and remorse, was a drop of calm water in a stormy maddened sea.' (LXII, 804) と書かれているように、大海の一滴に過ぎないのである。結婚も女の財産を当てにしていたもので、それを得るために7年近くも結婚の事実を隠しているうちに、女は他の男と駆け落ちしたことで計画は挫折する。美しい姪の Kate を好きになった Ralph が "I am not a man to be moved by a pretty face,...And yet I almost like the girl, or should if she had been less proudly and squeamishly brought up." (XXXI, 400) と思わず洩らすことばを、'... still there was, strangely though it may seem, something humanizing and even gentle in his thoughts at that moment.' と解説している。たとえ僅かでも彼に残されている人間性を彼が意識する時、金以外には友もなく、子もない孤独感が

彼を苦しめる。それを忘れさせるのが悪の計画であるが、一切の計画が挫折した時、彼は死を選ぶより他はないのである。

Cheeryble 兄弟は真面目一方の博愛家のように見えて、実は芝居気もある人物である。Nicholas が Madeline を愛しながら、彼一流の正義感から求婚することを断念し、兄の影響を受けている Kate も同じように Frank Cheeryble の求婚を斥けているという事情を Nicholas から聞いて、Charles はそれを諒とし、相手の希望を容れるのであるが、それは彼がこの二組の男女を結婚させる意図を知らせないための見せかけであり、また Nicholas のことばの裏に本心を見抜いているのである。Charles が Kate を愛していることで Frank を責めるのも同じ見せかけである。Nicholas も一時仲間入りをする Clummes の一座の役者たちは本職であるだけに、舞台を離れても、芝居がかった演技が巧みである。この小説の登場人物は皆それぞれ作者から振り当てられた役割を演じながら、それによって自分自身についての真実を意識的に、または無意識的に隠したり、暴露したりする。人生の舞台に登場する人間に演技はつきものであっても、その演技の動機なり、目的なりは個別的に異なっていて、演技という画題を掲げても、その種々相の複雑さを面白く見せているのがこの小説であり、最も深刻な演技を要求されているのが Ralph であると言えよう。

Ralph は '...it would have been impossible to mention any recognised profession to which he belonged'. (II, 6) と書かれているように、自分の職業を世間に知られないようにしている。彼は常に弟の Nicholas との比較の上で感じさせられた劣等感を征服するための武器として金銭を選んだ。弟の死後は同名の甥が同じような劣等感を与える。その醜悪な顔にも、争えない血のつながりで、美しい甥や姪との容貌の類似は見逃がせない。所有欲や嫉妬心は人間にとって自然な感情である。それが飽きることを知らない貪婪となり、怨恨となり、復讐心となると不自然である。目的を果たすための手段がすべて悪の実行に用いられるところが彼の不幸であるが、高利貸としてのその才能と成功、その裏にある挫折と失敗の交錯が彼の人生を築いて行く。その 'consummate art' (LIV, 710) が自然な感情を押し殺しているが、彼の計略と弁舌の巧妙さが生きている者に対する生きた感情を失わせているほどのものであれば、それはそれとして彼が、作者からは主人公ではないと断われていることば (I, 4) を裏切る可能性を読者に期待させるのである。彼がもしその信条通り自己を知ることができた時こそ、彼は人間の真実を知ったことになるが、その真実が何であるかは、'to keep back the truth' という彼のことばにふさわ

しく、自殺とともに読者の前から消えるのである。

もし真実が人間の力では知り得ないものであるならば、はじめからことばでも表わせないものである。ことばで表わそうとするかぎり、作者は彼によって表現されるのを待っているものを持つのであり、それを十分に表現し得るか否かは作者の力量次第である。言語によって表現し得る限界があるために、この限界を最高度に拡大することが作者の力量である。作者の力量が十分に発揮されている時、作者の文体は安定する。しかしこの小説に見られる言語や文体の安定性は、後期の傑作に見られる安定性と、質的に述べているようである。語が表面的な、辞書的な意味で用いられているので、全体を読んでも、断片的に読んでも、語の意味に文体による変化が起こらない。読み返すたびに解釈が変わるということがない。小説の構成に *Sketches by Boz* や *Pickwick Papers* のような挿話の集合という趣きが強く、作者の旺盛な想像力は十分に発揮されているが、それはなまの想像力で、芸術的に純化されていない観がある。内面性よりも外面性の強い作品である。

うわべと見せかけの世界に住み、それだけ見せかけに騙されやすい人物として主人公の母親 Mrs. Nickleby が登場する。彼女の特徴の一つにその饒舌がある。目の前の現実から何かと表面的に類似した過去の現実を思い出し、往年の生活の華やかさを誇るかのように、その場の空気を無視して話を独占したがる。話題が豊富であるように見えて、実は退屈な駄弁に過ぎない。何事を経験しても物の表面しか見ず、話に深味がない。表面的な事実に満ちた過去の思い出がおしゃべりの材料である。真実を見ないために経験から学ぶことは少なく、いつまでも無知である。そのような人物の想像力は空中樓閣 (aerial architecture) を築くだけである。表面的な現実に基づく空中樓閣は、快適な生活の外形に関するものである。理想としているのは上流社会の生活で、爵位を持つ人間に弱いことは、Sir Mulberry Hawk のような墮落した貴族にちやほやされて有頂点になる ('a perfect ecstasy of satisfaction', XXVI, 339) ことでわかる。貴族であるということがそのまま 'a large fortune' と 'a most unexceptionable husband' を意味しているのであり、娘がこの貴族と結婚するという空想は 'most pleasing meditations' (XXVI, 340), 'the brightness of a mother's fancy' (340—1), 'the pleasantest visions' (XXVII, 342) と書かれていて、彼女は幻滅を予想しない妄想 ('very agreeable delusion' (XXVIII, 357), 'happy in her delusions', (XXVIII, 370) を楽しむだけである。

Kate に読ませる三文小説から判断できるように芸術的な鑑賞眼の全く無い Mrs. Witterley がシェイクスピアの芝居の感動を語り、彼の生誕の地を訪問して感動を一層深めたと言うと、Mrs. Nickleby もかつてストラットフォードを訪ねた時の 'interesting anecdote' を語る場面 (XXVIII, 352-3) は、中流階級のうわべだけの教養がどんなものであるかを示している。

Mrs. Nickleby は自分勝手な空想に耽っておれないような、都合の悪い現実と直面しなければならなくなると、物分かりの悪さ ('a state of singular bewilderment and confusion', XXXIII, 423) がはっきり現われる。頭が鈍くて、分別に欠けるところが弱点である。Linkinwater と Miss La Creevy の結婚に対して最後まで反感を捨てないのは、覚りの悪さと同時に、しばしば彼女が 'the good lady' と呼ばれているその善良さの正体がどんなものであるかを示している。

Nicholas が Smike を彼の家に住ませることで母親の諒解を得ようとする時の、息子に対する彼女の勿体ぶった賢母らしいことば (XXXV, 444-5) は、彼女の正体を知っている読者を笑わせるに十分である。見せかけの世界に住む彼女の見せる見せかけなのである。しかしこのような単純な人物においては、その 'great appearance of dignity' (LXV, 831) が皮肉にも彼女の真実の姿を逆に示すことになるのである。

Mrs. Nickleby よりもずっと顔廢した虚飾の世界に住むのは、Muntle という名を Mantalini と変えて洋裁店を営む店主とその夫である。一家の利益のみを考え、物事をうわべでしか判断できない人物に Mr. and Mrs. Kenwigs がいる。前者は虚栄心、後者は遺産への期待で判断を誤る。ただ Kenwigs の方は、Lillyvick の妻が駆け落ちをしてくれたことから遺産が無事に貰えることになるのは、Ralph の妻の駆け落ちと、事情は違っても、一つの組み合わせである。Mr. Mantalini の常習的な狂言自殺と、Lillyvick の結婚の話聞いて Mr. Kenwigs の演じる狂言的行為²も組み合わせである。遺産の行方に一喜一憂する Kenwigs の一家は運命に翻弄されるしかない。

Sir Mulberry Hawk は一口で言えば、'the systematic and calculating man of dissipation' (XXVIII, 357) である。ことば巧みに人を自分の味方に引き入れて甘い汁を吸い、遊興に耽っている。Pyke と Pluck という有能な手下の協力によって淫らな野望を Kate に向けたことが彼の破滅の原因となるわけであるが、彼に利用されている馬鹿者の Lord Frederick Verisopht が

Kate に魅せられているのをよいことにして、彼のために悶ると称して、実は自分の欲望を遂げる計画 ('a plan of operations... avowedly to promote his friend's object, and really to attain his own', XXVI, 334) を練る。見せかけは彼にとって必要な作戦行動である。その代わり隠している真実が暴露すれば計画は挫折し、決闘で Verisopht を殺した後は自滅への道を進む。

Nicholas は初対面から伯父が嫌いである。しかし就職の世話をして貰ったことに対して、伯父の真意が分らぬままに、感謝せざるを得ない。しかも相手をよく知らずに嫌うということを若者らしい正義感で自ら戒めているのである。Dotheboys Hall の経営者 Squeers に対しても同様に、第一印象だけで判断することを一応保留するけれども、そこの教師になって忽ちその偽善を見破ることができた。Dotheboys⁸ という名の通り、この学校は生徒の金を巻き上げることしかししないのに、生徒募集の広告文だけはいやに堂々としている。Squeers が Nicholas の制裁で受けた重傷の治療費に生徒の金を流用したことを Ralph に得意になって吹聴する場面を除いて、世間的には有能な教育者としての見せかけを通している。しかし学校の名前が実体を示しているように、彼の偽善は拙劣で見えすいている。それにもかかわらず生徒が集まるのは、彼等が親のもてあます natural children や outcasts であるからである。

見せかけを本職にしているのが劇団の役者たちである。習慣づけられた演技を舞台の外でも披露して読者を楽しませる。Folair と Lenville の芝居がかつたいたずら (XXIX, 379), Lillyvick の結婚式に花嫁の付き添いを四人もつける滑稽、式場での Crummles の演出 (XXV, 326), 彼と Nicholas の決別の場面 (XXX, 399) など、派手で陽気な行動はそれだけで無邪気に楽しむ。作者自身、その演出効果を楽しんでいるようである。

Nicholas と Kate は若さと真面目さを身上とする人物で、そのために不自然な演技を無意識に勤めさせられている。二人には常に正義感が先きに立っていて、それが行動の動機となる。二人の第一印象は間違っていないのに、それのみで人を判断することは悪いという一般論を無視するほどには人生をまだよく知らない。相当に人生の経験を持ちながらも、現実に対する認識が不十分な上に、自分勝手な空中楼阁の夢に妨げられて愚者の楽園に住んでいる Mrs. Nickleby は、虚栄心から生まれる上品な生活の見せかけ (XXI, 266) で読者を失笑させる。Nicholas が Squeers や Sir Mulberry Hawk や Ralph に対し破邪顕正の勇を振るうのは相手の悪があきらかであるための当然の行為とも言えるが、Madeline Bray を愛するようになってからの彼の行動はその正

義感や責任感のために不自然な演技に変わる。Cheeryble に代わって彼女を保護する使命を全うしようとする責任感に、さらに彼女との貧富の違いも考えて (LXI, 796), 個人的な愛情を犠牲にせざるを得なくなる。彼の自己犠牲は heroism という見せかけの防壁に守られている (XLVIII, 625; LIII, 693; 'his assumed character', LIII, 696) が、それと同じように、Madeline もまた、娘のために思っているように見せかけて、実は自分のことしか考えていない父親 ('He is making believe that he thinks of her good, and not his own.' XLVII, 624) のために尽くすことを、自己犠牲を美德とする考えに陶酔しているのか、一向に苦しめない (LIII, 699)。Kate が Frank の求婚を断るのも正義感 ('her sense of what was right and honourable', LXI, 794) からである。

この小説は読む人によって、解釈に根本的な違いが起こることはないであろう。読者の興味は文体を知ることよりも素材を知ることにある。見せかけを持ち、演技をして見せる人物の数を増すことによって、素材の統一と変化に作品の構造の特徴が現われている。たとえば 'companion' という概念によって、二個の人または物の組み合わせが作られる。人の場合は Nicholas と Smeke, Kate と Mrs. Witterly, Cheeryble 兄弟と Tim, Hawk と Verisoph, Ralph と Squeers, さらに重要な人間関係としては最初に述べたように、親子の組み合わせがある。Ralph は物質的な利得のみで動くのでほんとうの友は金である。Madeline の母方の祖父の遺書も元のもの、書き直したものの二通がある (LXIII, 811) ことは、*Our Mutual Friend* にも見られる趣向である。

人は自分のほんとうの姿を自分でも見ることはむずかしい。自分のすべてを人に見せるということもできない。それに比べるとわざとの見せかけをすることは容易である。しかしその作為がかえって自分を見せてしまうことになることもある。この小説は作者の旺盛な想像力によって、社会における人間の演技を縦横無尽に描いている。しかし作者が登場人物を駆使してその見せかけを描いて見せる時、作者自身の見せかけがそこにあるかもしれないと考えて見ることもできる。

まず第1章は Godfrey Nickleby の紹介に始まる。伯父の遺産を得たことから生活が豊かになり、長男の Ralph には3,000ポンド、次男の Nicholas には1,000ポンドと農場を遺産として残すことができた。父の貧しかったころの苦勞を母から聞かされていた長男は、子供の時から金だけが人間の幸福だと

考え、重罪を犯さないかぎり、あらゆる手段を講じて財産を築くことを目標とするようになる。少年時代から学校の友達に高利で金品を貸すことを始める。ここで作者はこのように書くのと彼が小説の主人公であるように読者から誤解される恐れがあるので、話の本筋に急ぐという意味のことを書くのであるが、これは作者の見せかけであるように思われる。ストーリーの表面では Nicholas を主人公としてはいるけれども、読者にとって最も興味を引く人物は Ralph と言うべきであろう。Nicholas は生まれつきの善人であり、正義のために勇敢に戦うことをしたり、正義のために自分の愛情を犠牲にしようとしたり、苦勞もないわけではないが、彼は人間の弱さよりも強さの方が前面に出ている。Ralph は良心を持たない悪魔ではなく、自分で自分を見捨てた人間である。彼の良心は徳の実行へ向かう代わり、悪の実行を是認するわがままな判断であって、善心が悪心に打ち消される。良心が神から与えられた自然な人情だとする、彼の良心は不自然に歪められた人間性である。第19章で彼が Kate をなだめる場面は彼には珍しく人間味の出ている個所である。Kate の車が去った後、独り家へ入って行く彼があの世界からの霊を見た人のようであったということばでこの章は終っている。第62章で彼は自殺をするが、その直前、墓地を歩く彼の後を 'one black gloomy mass' が追って来る。家に着いても離れないこの 'black cloud' を、彼自身は "I know its meaning now, and the restless nights, the dreams, and why I have quailed of late. All pointed to this. Oh! if men by selling their own souls could ride rampant for a term, for how short a time would I barter mine to-night!" (LXII, 806) と魂があるが故の苦悩に帰している。この章で彼の心を占めているのは、Nicholas に看取られ、自分を見捨てて死んで行った息子の Smike である。すべてを Nicholas に奪われた絶望の狂乱状態で彼は首をくくる。恐らく彼は自分の魂の中に息子の霊を見ているのであろう。第19章のは弟の亡霊であると思われる。世間に対して虚勢を張っていなければならないことが、その虚勢から離れることを苦しくする。そのために彼は出来るだけ人前に出なければならず、孤独は彼にとって最も恐ろしいものである。孤独の苦しみを忘れさせるものが悪計画であるから、すべての計画の挫折は死をしか意味しない。金に対する執着に取り着かれた人間は作者の小説に多く登場する。これらの人物を追究することによって人間の真実を発見しようとしたと考えれば、Ralph のモットーの 'know thyself' は作者自身の自己探求であるとも言えるのであろう。小説としては *Dombey and Son* で今度は主人公となる Dombey に

Ralph は変身するのである。

〔注〕

- 1 XXVII, 343; 'the deep-sighted lady' (XXI, 269) は反語的に Mrs. Nickleby のことであり, 'Mrs. Nickleby's penetration and acuteness' (XXVII, 348) も同様, またよく 'the good lady' (XXVIII, 359, *etc.*) と呼ばれる。
- 2 ほかに Mr. Squeers の狂言 (LVII, 753), Linkinwater の誕生日の祝宴で Cheeryble 兄弟の見せる演技 (XXXVII, 477) もある。
- 3 Elizabeth Bowen の小説 *Eva Trout* の中で Denge & Donewell という住宅周旋業者の名をもじって Denge & Dotheboys としているところがある。